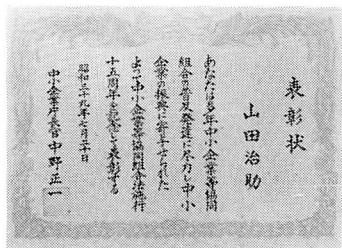




— 表彰をうけた喜びの日 —
 (昭和39年7月20日)



— 中小企業庁長官表彰状 —



— 24・5 歳ごろの治助 —



— 治助の還暦を祝い一族の
和気あいあいのつどい —



金婚を祝うて取引先から
贈られた治助の寿像 —

目次

はし が き……………一

山田家の家系……………三

腕白だった治助少年……………八

初代円右衛門の創業……………一〇

尾関屋の屋号のいわれ……………一五

理財にたけた二代目利三郎……………一六

三代目山田治助の登場……………二二

末広町へ進出……………二四

牧野頭取の話に発奮……………	二六
末広町問屋街の歴史……………	三〇
養父に保証人を断わられる……………	三四
商標で売れた時代……………	三七
親和会の誕生……………	四〇
関 東 震 災……………	四三
支那貿易で飛躍的な発展……………	四六
若くして問屋街の役員に……………	五三
家庭円満第一主義……………	五五

業界最初の見本市団体……………	五
上海、南京視察……………	六
空襲で新店舗を焼く……………	六
戦後犬山で営業再開……………	六
末広町へ復帰……………	七
連鎖市の育ての親……………	七
趣味としての義太夫と謡曲……………	七
恵まれた健康……………	八
その日の気持を忘れるな……………	八

年輪を超越した奉仕精神……………六六

重なる栄光と金婚の賀……………八九

株式会社尾関屋の歩み……………九二

△付 録▽

名古屋の組合の歴史……………九九

― 題字・石田泉城氏 ―

は し が き

株式会社尾関屋の現取締役会長、山田治助氏の年代記といったものを本にまとめ、子々孫々につたえたいという希望は、令息円一郎社長の多年の念願であった。治助会長の年代記は、とりもなおさず尾関屋の発展史であり、これに初代円右衛門、二代利三郎の両氏の事蹟を併せてとりいれると、それは名古屋の装粧品業界における名門、株式会社尾関屋の創業以来百有余年にわたる社史に通ずるものがあるからである。

だが、こうした年代記なり社史に類するものの編纂は、永年その企画をなされていても、何かの機会にめぐまれないと、なかなか実現は期しがたいものである。ところが、昨年七月、山田会長は、組合法施行十五周年を記念して、愛知県の推選に

より団体功労者として中小企業庁長官から表彰されるという榮譽をになわれ、しかも、この年に人生最大の慶事ともいうべき金婚の賀をむかえるという、かきなる栄光に浴されたことが動機となつて、会長の年代記を中心としたこの本の編纂の時期がおとずれたのである。

この本の内容は、山田会長の思い出話を軸とし、それに編纂者の時代的叙述をくわえたものであるが、初代の事蹟が、やや詳細を欠いているのは、明確な口碑がつかえられていないためである。また「遍歴七十年」と題したのは、この種刊行物の通例にならつたものにほかならない。

昭和四十年一月校了の日

山田治助伝記刊行会

山田家の家系

日本ラインの景勝でその名をしられた木曾川の清流に影をやどして、うつくしくそびえたつ犬山城。その対岸に、まどらかな夢のようにぼっかりとうかぶ青嵐せいりんのたずまい——。これは俗称夕暮れ富士の名で親しまれている大伊木山である。

この大伊木山を背にして、濃尾平野の見はるかな沃野よくやにひらけたところが、岐阜県稲葉郡鵜沼村字大伊木である。現在の各務原市かがみがはら鵜沼町大伊木が、その地にあたる。

この鵜沼村字大伊木の篤農家としてしられた山田清助の一家は、ふるくからこの土地の田地、田畑、山持ちで近隣にきこえた裕福な家柄であった。

清助には五人の子どもがあった。長男の清兵衛は、そのころの一般家庭の風習に

したがって家督を相続し、次男の辰弥は、おなじ村の岩城家へ養子としてむかえられ、三男の円右衛門は、のちに名古屋へでてかもし商を開業、尾関屋初代の主となる。また四男の次良右衛門は分家して一家をかまえ、長女のとよは大伊木の山田久四郎のところへ嫁いりして四男二女をもうけた。その四男に利三郎がうまれたが、前記の円右衛門に子宝がなかったので、後年、利三郎は円右衛門の養子となり尾関屋二代の当主となるのである。

この伝記のヒーロー治助は、明治二十六年七月九日、初代円右衛門や二代目利三郎とおなじ鶴沼村古市場字川東の農家で林家の林家の本家、林治八の三男としてうまれた。この川東は、日本ラインの清流をへだてて、すぐまぢかに犬山城の雄姿を仰ぎみられる景勝絶佳の位置をしめていた。

治助の父は治八、母はとらといった。母のとは山田久四郎の長女で林家へ嫁し

て三人の男子をうんだ。長男を治太郎といい、次男を治郎市といったが、治助はその三男である。

ところが、父の治八は、治助の二歳のときに三人の子どもをのこして死亡した。

治八の弟に友吉がいた。この友吉は日清戦争に現役の二等兵で出征したが、戦争がおわると無事に内地へ凱旋して兄の死を知ったのである。この兄の治八の死によって、亡兄の妻のとは若くして未亡人となり、三人の子どもをかかえて家業の農業にも支障をきたすようになったところから、友吉は親戚や周囲の者のすすめもあって、林家へ入り婿となつてとら、と夫婦になり、一男一女をもうけた。

こうした事情で治助たち兄弟は、父親ちがいの弟妹二人をあわせて男四人、女ひとりの六人兄弟の家庭に育つ



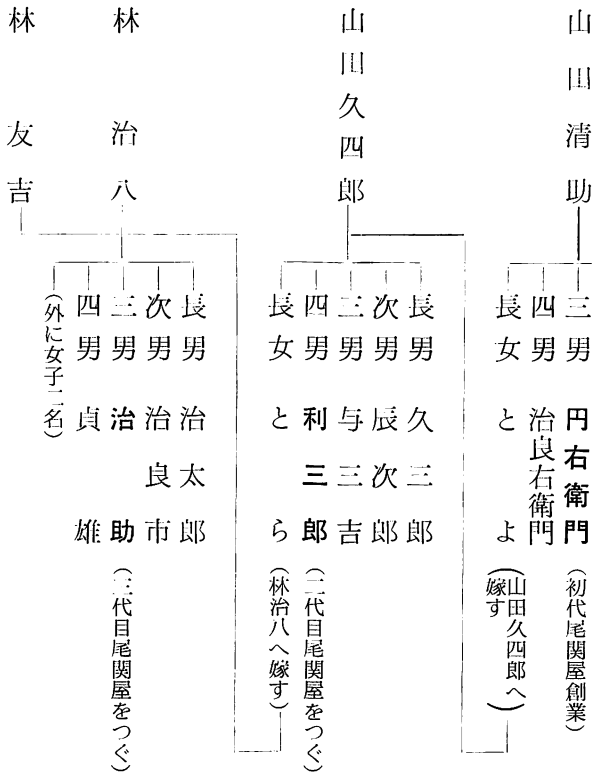
た。

この六人兄弟のうち長兄の治太郎は、のちに名古屋へでて林平吉というひとの酒
店に奉公したが、この酒屋が失敗したので、独立して犬山で小売店を開業した。次
男の治郎市は母親をたすけて家業の農業に従事したが、のちに分家して一家をたて
た。そして三男の治助は、伯父にあたる利三郎に見込まれて名古屋へでて尾関屋の
三代目をつぐことになる。また四男の貞男は、本家の跡目あとめを相続して現在にいたっ
ている。

ここに参考までに山田家の系図を掲げておこう。

|| 山田家系図 ||

┌───┐
└───┘
長男 清兵衛
次男 辰弥

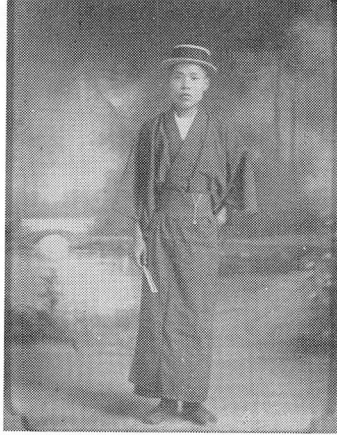


腕白だった治助少年

郷土かうんだ先覚、志賀重昂によって日本ラインと命名されて以来、悠久千古を
つらぬく大木曾の流れは。犬山城を盟主として、その景観はひろく世のなかに紹介
されるようになった。犬山城はむかしは、またの名を白帝城はくていじょうとよばれたが、いまも
ここをおとずれる観光客のあいだに親しまれている。

こうした大自然の景勝は、いつとはなく少年をおおらかにそだてあげるものか、
少年時代の治助は腕白者で、本家の林家の周辺にある新家しんやや分家ぶんけのあそび友だちを
あつめて餓鬼がき大将となり、戦争ごっこなどをして、しばしば母親を手こずらせたとい
う。そうしたことがたびかさなって、ついには

「こんな腕白な子どもは、いっそ京都のお寺へでも預けて、坊さんにしてしまっ



たほうがましたよ」

といわれるようになって、治助少年は、いっかは京都へ寺奉公にだされる運命におかれていた。

そうした環境のうちにあつて、治助少年は明治三十八年の春、村の鶴沼小学校を卒業すると、やがて、そこには三代目尾関屋の当主になる因縁が待ちわびていたのである。

これはのちの話になるが、治助は村の小学校を卒業すると、伯父の利三郎にのぞまれて尾関屋の店へひきとられることになり、中学校へ進学する志望がたれたので、当時、通信教育で人氣のあつた早稲田講義録をとりよせて、一心不乱に勉強した。

初代円右衛門の創業

尾関屋の初代山田円右衛門は、天保十一年、前述のとおり岐阜県稲葉郡鵜沼村大伊木の山田清助の三男として生まれた。安政二年、十七歳のとき東京へでて、当時、床山とこやまといわれたか、つら、屋へ見習い奉公したともいわれているが、くわしいことは伝えられていない。ほどなく名古屋へでて、そのころ西区堀詰町で元結もとゆいの製造を業としていた中彦という店へ住みこみ奉公をした。

このあたり一帯は巾下はぼしたといわれたところで、円右衛門が奉公にでたころには、むかしの清州越しの老舗の流れをくむ問屋や商家などがあつまっていて、なかなか繁栄をきわめていたという。

この堀詰町の中彦商店に奉公しているうちに、円右衛門が目をつけたのは、西区

塩町で、そのころ婦人の結髪のためし毛としてつかわれるかもじを製造している店があった。世話人を介して円右衛門は、この店へ徒弟とていいりをした。ここで二、三年奉公づとめをしてか、もじをつくる技術を習得すると、円右衛門は主人のゆるしをえて、中区常盤町に一軒を借りうけ、尾関屋という屋号でか、もじの製造販売をはじめた。得意先きは市内の小売店と女髪結い師などであった。このころの記録がつけられていないので判然としたことはわからないが、時は万延元年ごろで円右衛門の二十五歳ごろのことといわれている。

円右衛門の開業した尾関屋の店は、そののち順調に発展していった、どうやら営業のメドがつくようになると、円右衛門は将来の利殖のことを考え、カネをくめんして南伏見町二丁目七番地に家屋つきで売りものにでいた四百八十坪ほどの土地を手にいれた。それは明治十六年ごろのことといわれている。

この家には借屋が五軒あって、べつに一軒の住居すまいがあつたので常盤町の店をひき払つて、ここへ移転した。この店は四十坪ほどで裏は竹藪つづきになり、ひろびろとしていた。借屋は人に貸したが、家賃は一軒十三銭だった。円右衛門は、このほかに東本願寺別院南と、伊勢山町にも土地を買つて、商売のかたわら、ひたすら利殖の道にもこころがけた。こうして初代尾関屋の店は、円右衛門の創業の努力が芽をふいて日とともに発展していったのである。

そして、ここに十六年の歳月が流れたが、フトした病いがもとで円右衛門は床につくようになり、ついに再び起きあがることができなかつた。明治三十二年九月二十九日のことで、行年は六十歳だった。

初代円右衛門には子がなかつたので、常盤町時代に隣家で塗り箸の製造を業としていた山田勘次郎の娘むすめを養女にもらいうけ、円右衛門の甥にあたる利三郎を婿



眠る門の右衛門
地墓の家田山

養子にむかえて夫婦にした。明治三十二年五月二十一日のことで、円右衛門の死に先きだったこと四カ月ほど以前のことである。利三郎の二十三歳のときである。

ここで参考までに初代円右衛門が常盤町に移転した明治十六年ごろから、二代目利三郎が養子にむかえられて尾関屋をついだ明治三十二、三年ごろから四十年ごろまでの二十数年間における婦人の髪型のうごきをながめてみよう。

明治も十五、六年から十七、八年ごろの洋風崇拜（おうふうはい）の鹿鳴館時代（ろくめいかん）を経由して二十七、八年の日清戦争時代になると、さすがに戦勝気分（せんしょうきぶん）で世相は一変して風俗も日本調となり、髪型のうえにも時代が反映されていた。とくに三十七、八年の日露戦争時代となると髪型も、さまざまなものごとりいれられて、かまじ（かまじ）の需要もいっそうのびて

きた。

——若い娘には島田髷^{まげ}、中年の人妻には丸髷、そのほかいち、ちよう、返し、束髪^{そくはつ}、島田くずしなどがあつた。そのほか新様式の結髪があらわれ、日露戦争のあとには束髪の前髪をたかくしたヒサシ髪で、二〇三高地といわれた新髪型が流行した。

また日露戦争をエポックとして髪型にもふたつの傾向がハッキリとみられるようになった。それは知識階級は好んで束髪（洋髪ともいわれた）を結^ゆうようになり、下町^{したまち}では一般に日本髪を好む風潮がみられるようになったことである。町の女髪結い師も「何々巻き」といった新様式の束髪を考案して、自分たちの技^{わざ}を競^まうようになったのである。

尾関屋の屋号のいわれ

初代円右衛門は、常盤町で、かまじの製造販売をいとなむにあたって、その屋号を尾関屋と名づけた。この時代の商家のならわしのひとつとして、店主の生国の地名などをよく屋号としたものである。円右衛門は美濃の出身だから美濃屋とか岐阜屋とかの屋号をつけるところであるが、そこは思慮ぶかい円右衛門のことである。おなじ屋号をつけるなら由緒ある屋号をえらびたいものと考えぬいたすえ、尾関屋という屋号をつけた。

この尾関屋の屋号については、つぎのような由来がある。

謡曲「蟬丸」や小倉百人一首でしられた蟬丸せみまるは、伝説によると人皇六十代だいてい禰天ねてん皇の落胤らくいんといわれ、事情があつて宮家をさると、京のみやこをあとに逢阪山のほと

りに隠退して、もつぱら詩歌や能曲などの風流をこととして一生を送った。この蟬丸に関せきという女性がつかえていた。

関女せきじよは蟬丸が、かねてから能狂言に使用するかもじ、よようのカツラを欲しがっていたので、関女は長年のあいだ自分の抜け毛をためて、かもじ、よようのカツラをこしらえて蟬丸にさしだした。蟬丸は、さっそくそれをつかって能狂言を演じたところ、たいへんな好評を博した。そこで関女は、さらにこれに工夫をこらして改良をくわえ、考案したのが婦人かもじのかもじのはじまりだといわれている。そうしたことから関女は、後年、かもじ、業者のあいだで「かもじの祖神」として崇あがめられるようになった。

昭和のはじめ、関女は、これらのかもじ、業者の発起で琵琶湖畔、京津電車上関寺（大津市）の付近にある蟬丸をまつる蟬丸神社の境内に関明神として祀られ、毎年

五月二十四日の大祭日には盛大な祭祀さいぎをおこなわれるようになった。ついで昭和三年、四年には東京、名古屋の、業者が、この関明神をそれぞれ地元に分祀してまつるようになったのである。

覚王山日泰寺の本堂の東、放生ほうじょうガ池につづく広大な墓域の一角にある山田家（尾関屋）の墓地つづきに、この関明神を分祀した記念碑が、四囲をみどりの樹木にまつまれて巍然きぜんとしてたち、ありし日の関女の功績を無言のうちに語りつたえている。

円右衛門は開業にあたって、このか、も、じの始祖関明神の「関」の字と、尾張の「尾」の字とをつづりあわせて尾関屋という屋号をつけたのであるが、この屋号をえらぶまでには相当の苦心があったようである。



理財にたけた二代目利三郎

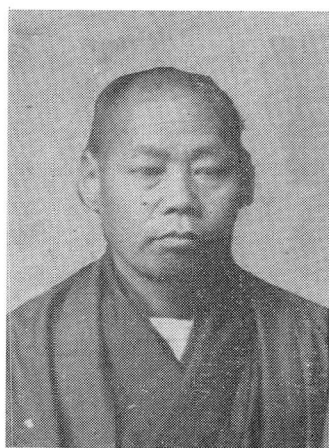
こうして初代尾関屋のいしずえは円右衛門によって築かれたが、円右衛門は、どちらかといえば初代創業のひとにふさわしい進取的な一面をもち、人の下風かふうにたつことを潔いさぎよしとしない性格の持ち主だったようである。この初代の事蹟を知る記録がないのは遺憾といえるが、その六十歳の生涯は、文字どおり尾関屋の店の基礎づくりのために身心をささげつくして、自分というものを顧みなかったようだ。

尾関屋二代の当主利三郎は、前にものべたように初代円右衛門の五人兄弟のうち
の長女が嫁いりした先きでうんだ四人目の男子で、いわば円右衛門と利三郎とは伯
父と甥の間柄である。だが、利三郎は若いころから病弱の質で健康にめぐまれな
かったため、あとにのべるように三十五、六歳という若さで家督を三代の治助にゆず

りわたして若隠居をしたが、病身者にしては七十八歳という高齡をたもって、きざい氣随ざいのままに余生を送っている。

利三郎は、円右衛門の養子となり、養父の死によって家督を相続したときは二十歳の若さだったが、利三郎は自分の病弱を、その理財にたけた才能をはたらかせて補おぎなっていた。理財家の利三郎は、商売でもうけた金で土地や借屋をふやして、はやくから余生の安樂を願っていたようである。

初代にくらべると、利三郎は風貌も体たい軀くも、ひとまわり小さかったようだ。その性格も円右衛門ほどの活達かつたつさはみられなかったが、利三郎のソロボンの手堅さは同業者のあいだでも評判があった。たとえ懇意なひとに金を貸すときにも、担保たんぽ



—二代目利三郎—

として現物をうけとることを忘れなかった。

だから、よく知人から

「利三郎さんのやりかたは、石部金吉そのものだ。ああまでガッチリしておれば、他人からめつたに損をかけられるようなことはあるまい」

といって、むしろ、そうした利三郎の手堅いやりかたを称讃する者があつたほどである。

治助も、この養父の堅物かたぶつぶりにはたびたび悩まされた。

三代目山田治助の登場

岐阜県稲葉郡鵜沼村の郷里にあった治助少年は、せいらい生來の腕白がすぎて村の小学校を卒業すると、京都へ寺奉公にいやられる運命にあったが、尾関屋の二代目をついだ伯父の利三郎に子どもがなかったので、伯父は治助の母親と相談のうえ、治助少年の身柄をひきとることになった。

治助少年は、この伯父につれられ犬山から馬車にのって始めて名古屋へきた。そのころ広小路本町のかどに日露戦争の戦勝記念の凱旋門があったことを治助はおぼえている。

こうして治助の業界生活は、その尾関屋への入店から第一歩がふみだされることになった。明治三十九年四月のことで、治助の紅顔十四歳の春のことである。



明治三十九年といえば、わが国は日露戦争後の景気の好況時代であった。初代遠藤波津子が理容館という、わが国最初の美容院を東京の銀座で開業したのも、このころのことだった。

郷里では腕白者に思われていた治助は、若さに似あわず律義りちぎなはたらき者で、入店以来、陰かげひなたなくキビキビとして働らいた。そのころの尾関屋の店は、伯父夫婦のほか職人と女中が一人ずつ、それに治助をいれて五人暮らしの世帯だった。

伯父の利三郎は、自分との血縁のつながりということをぬきにしても、この律義者の治助に格別に目をかけて、将来、治助に家督をゆずる決心をしていた。治助もまた、そうした伯父の気ごころを察して忠実に店の仕事にせいをだした。

やがて四年の歳月がすぎ、治助は十八歳になった。利三郎は、まだ三十代のはた

らきざかりだったが、生来の病身のため店のことは万事につけ治助まかせで、若隠居のような境遇にあつた。利三郎の妻のかきも夫に似て蒲柳はりゆうの質だつた。

「私が十八歳のときには、店の仕事は仕入れから得意先きまわりまで、なにもかも私ひとりでやらされた。伯父は堅物かたぶつで変人といわれたひとだったが、商売のほうは私があるのでスツカリ安心はしていたものの、ずいぶんとムリを承知で、わがまま放題のことをいって、私をこまらせたものです」

往年を回顧して治助は、こう語っているが、いわばこのころの伯父の利三郎は、治助にとってはウルサ型のしゅうとのような存在だつた。

むかしから三代つづく商家は稀*れだといわれている。初代が汗水でかせいで蓄積した遺産を二代目がまもり、三代目がこれを湯水のように浪費するか、商売に失敗してスリ減らしてしまうのが、おきまりのケースのようにいわれている。

だが、尾関屋は三代目に治助をむかえて、初代円右衛門の活達な創業精神と、二代目利三郎の蓄積精神のふたつをとりいれ、その取扱商品も時代の変遷につれて、家業のかもじから頭飾小間物へ、そして現在の装粧品へと飛躍的な発展をとげることになるのである。

末広町へ進出

話は前後するが、尾関屋の南伏見町時代のことである。

当時、利三郎は、そのころの世間の慣なわしで、借屋持しゃくやちというところから町内の顔役として世話係りをしていた。そこへ日露戦争がはじまると、利三郎は市役所か

ら伝達係りのような仕事を押しつけられて、出征兵士の見送りとか、遺家族の慰問というような雑用においたてられる毎日がつづいた。

病身者の利三郎は、さすがにこれには精魂せいこんをつかいはたして

「人の世話というものはホドホドにするものだ。いくら非常時だからといって、毎日こんなに兵隊の世話ばかりやらされては、こちらがまいってしまふ。こんな厄やっ介かい千萬な境遇からのがれて、もっとノンビリできるところへひっ越したいものだ」と、しみじみ町内の世話役というものの悲哀を感じるようになった。

それには、いまひとつ利三郎の気持ちをうごかした事情があった。それというのは利三郎の考えによると、これからの商売というものは、こちらから得意先きまわりをするばかりが能のうではない。おなじ商売をするにも、現金客を店へひきつける方法を考えねばならぬ。そうするには、地の利のよい場所に店舗をえらぶようにしな

一尾関屋の旧店舗一
(昭和27年ころ)



ければならぬ、と考えるようになった。

ちようど、そのころ門前町五丁目の大須観音仁王門通り南の西側にあった紅屋という店が売りものにていた。間口二間半のせまい店だったが、相談がまとまると早速その店を買いこみ、ここを出張所ということにして開業した。店はちいさかったが、場所柄だけに新規の客も相当つくようになり、店は日とともに繁盛した。

この門前町の出張所をふくめて、尾関屋のいわゆる「南伏見町時代」といわれるのは、それから約一、二年つづいたが、利三郎の間屋街進出の多年の念願がかなって、末広町三丁目西側の借屋を一軒借りうけて、そこへ移転した。

この店は間口二間半、奥行き十間という奥ぶかい家で、家主は

町内の紙文商店という袋物卸商だった。南隣りには小出藤十郎という舞台化粧専用の楽屋がくや白粉を扱っている古風な店があった。

治助が郷里の鵜沼をでて六年目にあたる明治四十五年は、治助の満二十歳のときで徴兵適齡期をむかえた。徴兵検査の結果は乙種で現役をまぬがれ、天下晴れて商売に精進しょうじんすることができた。

そこで治助は、伯父の利三郎や郷里の母親たちの奨めもあって、この年、利三郎の妹にあたることと結婚した。当時ことは、末広小町々と評判されたほどの美人で、商売の道にもあかるかった。治助は、この理想の妻をむかえて、ますます家業にうちこむようになり、いっぽうでは気むずかし屋の養父にたいしても孝養をつくした。

牧野頭取の話に発奮

治助は、二十二歳で養父の利三郎から家業をゆずりうけた。そのとき利三郎は、資産として店の商品のほかに売り掛け金をふくめて二千円に相当するものを治助にあたえ

「仮に、これらのものがなくなっても、今後は自分は、いっさい金銭上の援助はしない。そのとき、お前たち夫婦が店をやめて労働者になって働こうと、何をしようとするか、自由だから勝手にするがよい」

という、きつい宣告をうけた。こうした厳しい養父の性格は、治助は日ごろからわきまえていたとはいうものの、改めてこうした手続きしい申し渡しを養父の口からきかされると、治助は堅くこころに誓うところがあった。それは、つぎの三つに

目標を置いて商売に精進をつづけることであつた。

——第一に「商売」に励むこと。

——第二に「貯蓄」を心がけること。

——第三に「不動産」を持つこと。

この三つの目標を堅持して、一年間の商売の利益を三分し、その一つは店の回転資金に、その二つは貯蓄に、その三つは不動産を買うことである。これだけを堅くまもつてゆけば、銀行の信用もできて必要なときに資金の借りいれもできる。

また適当な土地を手にいれておけば、知らず知らずのうちに地価が騰つて資産がふえていく。三十年前に一万円で買った土地は、三十年のちには幾十倍にもなる。商売で一獲千金をつかむことは不可能だが、不動産ならそれが可能である。

石のうえにも三年という諺ことわざがある。三年の辛抱しんぱうをすれば、すこしは貯蓄もでき

る。それを三回つづけると百万円ぐらいの金は貯えられる。その百万円で金持ちになつたような考えをおこさず、その百万円を上手に利用すると、さらに三年先きには三百万円にもなつて資産はふえていく。

以上の話を治助は、そのむかしニコニコ貯金でしられた不動銀行の牧野頭取からきかされて大いに発奮し、不動銀行の株を二、三株買ったのが証券に投資したはじまりで、治助はそれ以後、商売でもうけた金で利殖をふやしていった。

末広町問屋街の歴史

こうして尾関屋は末広町へ進出以来、この問屋街にあつて着々その地盤をかためていったが、尾関屋の繁栄史をつづるにあたって、ここに末広町の問屋街のプロフ

イルを紹介しておこう。

末広町は、むかしは一帯の松原で、ここに那古野山なごのがあつて春秋の行楽のシーズンには、城下町の人びとの物見遊山ものみゆざんの場所となっていた。城下町が南にのびるにつれて、この松原をきりひらいて松原町といわれるようになったのは、寛永七年のこと徳川三代将軍家光時代のことである。

そののち、いく屋霜せいそうをえて宝永五年の五月、末広町と改名された。この命名のおこりは、このあたりに扇ガ関という関所があつたので、その名にちなんだものだといわれ、また一説には、この町は末でひろがっていたので末広町の名がつけられ



—現在の末広町—

たとも伝えられている。

ところで鉄砲町、末広町が問屋街として、こんにちの発展をみるようになった基盤ともいわれるのは、現在の御幸本町の前身、本町の問屋街の繁栄があったことを銘記しなければならない。

現在、御幸本町といわれているむかしの本町は、すでに慶長十四年の名古屋城の築城以前から問屋の集団地帯としてひらけていた。当時、この本町の名家には町人頭がしちの花井氏をはじめ足利以来の茶屋氏などがあり、大店おおだなには青貝屋、十一屋、水口屋などという呉服小問物をいとなむ問屋が軒をつらね、本町四丁目には、札の辻という問屋場といやばがあった。この問屋場といやばというのは、当時の諸国往來の旅荷たびにをここで荷うけしてさばかれたところで、この本町は、名古屋の城下町における有力な問屋街として全国的にその名を知られていたのである。

ところが、城下町の繁栄が次第に南へのびてくると、この本町の問屋街の延長ともいえる新しい問屋街が、ここにうまれた。それが現在の鉄砲町、末広町である。

とくに末広町は、ふるくから小間物屋と袋物屋の問屋街といわれていた。記録にのこされたところによると、末広町で業界関係問屋の草分けくさわけといわれているのは裁縫用具の備六商店で、その創業は、いまから二百六、七十年前といわれ、ついで小間物の伊勢庄商店の創業が安政年間といわれており、明治四十二、三年ごろには小間物と袋物をあわせて十五、六軒の業界関係の問屋がかぞえられた。

養父に保証人を断わられる

門前町から移転した末広町三丁目の店は、商売が繁盛するにつれて狹隘きようあいをつげるようになつた。このせまい店のなかへ梱包こんぽうされたかもじの原料毛などが入荷すると、店内は足の踏み場もないくらいで身うごきがとれなくなった。そうしたとき、幸いにも向い側の借家が一軒あいたので、そこへ移転することにした。現在の宮吉ガラス店のあるところで、四十坪ほどの店だった。

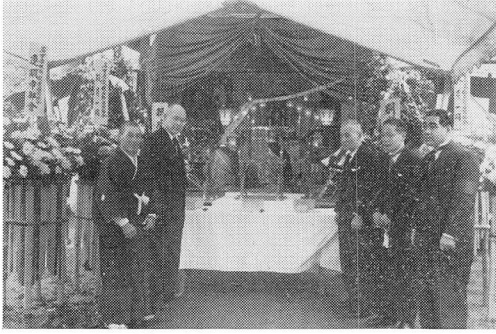
この土地は、当時の若宮八幡の宮司の所有地になつていた。そのち、尾関屋の店をふくめ両隣りをあわせて、三軒ぶんの土地を地主から譲渡してもらふことに話しあいができた。いよいよ土地を買う段階になると、この三軒ぶんの百三十坪の土地を治助が一手にひきうけて買ひとることになり、その土地代金二万円を当時の中

央信託から借りいれることになった。

そこで治助は、そのころ千早町の別宅に隠居していた養父の利三郎に保証人になってもらうようにたのみこむと、養父からこういってことわられた。

「いくら親子の間柄でも金銭のことだけはべつだ。お前が商売のために借りいれるカネの保証人に、親のわしがならないといかぬという理屈はない。せつかくのたのみだが、わしは保証人にはならん」
養父の返事は、意外にも冷た^{つめ}かった。

治助は、平素の養父の気性を知りぬいているので、格別ガツカリしなかった。かえって、こんな忠告めいたことを養父の口からきかされると、これは若い自分にたいして独立自尊の勇気をあたえるための親の慈悲なのかもしれない、と善意に解釈した。



そして右の事情を両隣りの主人にうちあけると、ふたりの主人も自分に直接関係のあることなので、ふたつ返事で保証人をひきうけてくれた。

治助は、中央信託から二万円の金を借りいれると、その金で無事に土地購入の手つづきをすませた。この借りいれ金の毎月の利息は百二十円で、二万円の元金を二年目に全部返済できたときには、さすがに治助はホッとした。そして治助を中心に、両隣りの主人と三人のあいだで祝杯をあげたほどだった。

治助とひさしく水魚すいきよの交りまじわをしている某商社の社長は、こんなことをいつている。

「尾関屋というひとは、どんな場合でも自分の感情をムキだしにするようなことはしない。何ごとにも辛抱がよく、めったに他人と言い争ったことがないのは、気むづかし屋のあの養父のようなひとに仕えて苦勞してきたせいだと思う。それでい

て尾関屋さんの意志のつよいところは、家康型とでもいえるだろう」

よく治助の真骨頂しんこつちようを語りえたコトバといえるだろう。

この話は大正二年ごろのことといわれている。

商標で売れた時代

明治時代がおわりをつけて大正時代にはいると、活動に便利な洋装が、そろそろ流行しはじめた。結髪もヒサシ髪から変化した七三の分け髪、耳かくし、カール巻といった洋髪があらわれはじめ、ヘヤーピンやスペインピンといわれた大型ピンが売れだした。だが、大正の初期のうちは、まだまだ日本髪は多くの女性層の支持を

えていた。

このころの尾関屋の取扱商品は、本業の**かもし類**のほかに**頭髮の付属品**として、**まげ形**、**ヘヤーネット**、**すき櫛**、**元結**、**丈長**、**ヘヤーピン**、**おくれ毛止**、**香油**、**びんつけ油**などといったもので、この時代の一般問屋の傾向として、自分の店の商標をつけた商品の販売にベストがつくされていた。自分の店のブランドを売りこむ傾向は、マスコミ時代のこんにちにちが始まったことではなく、すでにこのころから盛んにおこなわれていたのである。

尾関屋でもご多分にもれず、これらの商標を持っていた。その多くは六十四類で**金鶴**、**女神**、**王国**、**菊の世**、**髪おおくにの友**といったものであるが、このうちで現在つかわれているのは**金鶴**だけである。なかでも**菊の世**という商標に人気があった。国民の忠誠心が燃えていた時代の反映といえるだろう。

「名古屋印刷史」に大平公墨おおひらこうぼくという画工の書いている「平版界四十年の回顧」という一文は、明治、大正時代の名古屋の商家における、これらの商標界の消息の一端をつたえた貴重な文献である。

大正三年七月、第一次世界大戦がおこった。おなじ戦争状態でも、このころはまだ物価の統制がおこなわれていなかったたので、物の値段は毎日ウナギのぼりに昇騰しはじめ、インフレを助長して、どんな商品でも羽がはえてとぶように売れた。そのころ尾関屋には、四、五人の店員がいたが、明け暮れ目のまわるような忙しさだった。

世間には戦争成金といわれた、にわか分限者ぶんげんがあらわれるようになった。この戦争景気は、そののち数年つづいたが、やがて戦後の反動景気がおとずれると倒産者が続出して、一時的な戦争成金の姿も水泡のように消えていった。だが、かもじ、業

界のような堅実な商売にとっては、戦争は福の神がまいこんだようなもので、尾関屋もこの戦争景気のおかげで蓄財をふやした。

そうした戦争の好況時代——大正三年十一月十二日、治助夫婦のなかに長男がうまれた。治助夫婦のよろこびは格別で、初代円右衛門の「円」の字をとって円一郎と名づけた。現在の株式会社尾関屋の社長である。

親和会の誕生

大正八年といえは第一次欧州戦争が終結した年で、この年の下半期から翌九年の春ごろへかけて経済界は未曾有の混乱に陥った時期である。名古屋市内でも二、三

の銀行がつぶれるという騒ぎがおこった。その余波をうけて当時、市中の一流銀行といわれた愛知、名古屋の両銀行をはじめ銀行という銀行には預金者が押しかけ、取りつけ騒ぎがもちあがるという人心の不安時代であった。

この騒ぎが、ようやくおさまった五月ごろ、名古屋業界の中堅卸業者によって親和会という親睦団体が結成された。この親和会が結成されるにあたって、治助は発起人の代表となってその設立に尽力した。

親和会の会員は約二十名ほどだったが、会員のほとんどが別家べっけが多かったので、この会は俗に別家組のあつまりだともいわれていた。それだけに業種も多種多様で、小間物、頭飾品をはじめ袋物、化粧容器、かもじ、貴金属類、木櫛、化粧品などのオール業界関係の業者がふくまれていた。

親和会は、単なる親睦団体にすぎなかったが、毎月一回定例日に会員があつまり

商品のセリ市を催した。このグループの発言力が業界の世論をうごかすようなこともあって、親和会の存在は当時の業界からも重視されていた。

治助は、このグループの有力メンバーのひとりとして会計をうけもち、桑山喜重郎といった人々とともに会のリーダーシップをとっていた。

親和会は、のちに七互会という見本市団体をうむ母体となったが、この親和会時代の尾関屋は、業種的にも商品の間口は相当にひろげられており、地元小間物業界における花形的存在としてしられ、業者のあいだの信望をあつめていた。

関 東 震 災

その夏、和歌山県のある地方では鱚の大群が川を逆かのぼって押しよせ、この地方の人びとをおどろかせた、というニュースが新聞の社会面につたえられた。鱚が群れをなして川を逆かのぼる季節には海底に異変があつて、その時期には地震がおこる——という言いつたえがある。そんな不吉な前ぶれがあつて、大正十二年九月一日の正午ちかく、突如として東京をおそつたのが関東震災であつた。

この震災で東京の都心は、わずか半日ほどで灰燼に歸したので物資の欠乏はいうまでもなかつた。食料品こそ辛うじて配給のルートにのせられたが、一般日用品となると野放し状態で、これらの物資は名古屋や関西方面からヤミ値で毎日ドンドン東京へ輸送された。その状態は、太平洋戦争直後のヤミ値時代の世相と、すこしも



かわりがなかった。

罹災直後の東京市民のあいだでは、衣食をのぞいて真っ先に欲しがられたものは、タオル、手拭、石鹼、歯みがき、歯ブラシ、櫛、毛びん類、ヘヤーネット、鏡、化粧用クリームなどであったが、これらの商品が五倍、六倍のヤミ値で右から左にひっぱりだこのように売れた。

鉄道がマヒ状態におちいり、輸送機関が、こんにちほど発達していない時代のことなので、地理的条件からいっても、罹災地への物資の輸送に漁夫の利をしめたのは名古屋であった。このころの名古屋商人は、予期せぬ震災景気にわきたっていた。

関東震災当時を回想して、治助は、つぎのように語っている。

「あのころ、名古屋から焼けあとの東京へ流れこんだ商品は、たいへ

んなものだった。いまでこそ、こうしたことが言えるが、あのときは東京むけのものは商品でさえあれば、どんなものを送っても売れたもので、当時の物価の安い時代に五千円の現金商いができたとか、一万円の商売ができたとかという景気のいい話ばかりだった。

そのころ、私は東京のヤマキ商会に關係していたので、ヤマキ商会から送れといってくるものは、名古屋からドンドン東京へ輸送したが、それが何倍というヤミ値でおもしろいほど売れたので、こんな商売冥利みょうりにつきる話は、またとないと思いましたが」

また、東京という日用物資の仕入れ先きを一時にうしなつた関東、東北、北海道地方へは、この関東震災を契機として名古屋商品が進出するようになった。尾関屋でも、この機運にのつて、これらの地方へ販路を拡張したが、この時代に取り引きを

結んだ店との顧客関係は、現在なお継続されているといわれている。

このころは、また通信販売のさかんな時代であったので、関東震災は、この方面でも名古屋商人の通販への意欲を昂揚させた。

支那貿易で発展

関東震災は、これまで消極的だといわれていた名古屋商人の魂を根底からゆすぶったが、当時、かもじ、業界の新進気鋭といわれた治助が、この好機を見のがさず、あすへの第二段階の飛躍の手をうったのが、支那貿易であった。

これより先き、知多郡横須賀町に人毛原料を扱う半農半商の店ができたが、日増

しにふえるか、もじの需要は、内地のボロ買い人の手で集荷される人毛だけでは、とうていその需要をみたすことができなくなった。

元來、支那の人毛は、日本の人毛にくらべると毛質が太くてわるく、日本の人毛は細くてつよいというのが特徴とされている。しかし雷給のバランスがとれなくなつてくると、こうした支那の人毛を輸入せざるをえなくなつてきたのである。

関東震災の翌大正十三年、治助は、その支那の人毛原料輸入の手はじめに大阪の川口へでかけ、ここに在住する支那商館の華僑かきょうの手を通じて、上海、蘇州、湖南省あたりから人毛原料を輸入することになった。

このころの日本内地の民間の支那貿易といえ、この大阪の川口にいる華僑を経由しておこなわれていた。これらの華僑仲間では、支那貿易の顧客とみれば、

「チャンクイ、チャンクイ」

といつて、お客を料亭へ案内して歓待した。治助も、よくそうした饗応きやうおんをうけた。チャンクイとは日本語で「たいしようぐ」という敬語である。

治助は、この支那貿易では、あちらの人毛のほかに熊毛しやくまといわれた上質の原毛も輸入したが、取引きの手数料は一歩だった。最初は現金取引きだったが、信用がかさなってくると、現品と引換えに約束手形で取引きができるようになった。そうになると、ますます貿易がおもしろくなり、知多郡横須賀町の愛電（いまの名鉄）駅前駅前に倉庫を借りうけて、ここに日本人毛商会を設立した。

このころの知多郡の人毛加工業は、かもじ原料や半製品の生産を主としていたが、一時その黄金時代には、知多人毛組合員は百名を越す盛観をきわめたほどで、知多郡上野、横須賀、大野町で生産されるかもじ原料は、わが国の需要の七〇パーセントをしめていたほどである。このほかにかもじの半製品は、広島県矢野町と東



京、大阪の一部でもつくられていたが、人毛王国の知多郡との比較ではなかった。

こうして治助が設立した日本人毛商会の業績は、じゅんぷりまんぼ順風満帆のいきおいでのびてい

った。ところが、大阪の川口に二人の若い支那通のブローカーがあつて、ぜひ私た

ちを使つてくれとたのみこまれたので、治助はこの二人を採用する

ことになり、そのひとは横須賀の日本人毛商会で、あとのひとり

は現地の支那で人毛の買いだしにあたらせることにした。

人毛を輸入するには、支那人の商社が上海にあるので、そこへ人

毛を集荷して銀行で信用状をとりくみ、必要な金をこちらから送金

すると、その信用状で現品がこちらへ引換え証つきで到着する。そ

こで、こちらの取引銀行へいって引換え証をうけとり、為替手形

代金を支払うと、その金額の仕切り書で税関の輸入税を支払い、名

古屋港または大阪港で現品をうけとり、これを横須賀の日本人毛商会へおくられてくる。このようにして治助は、大阪、名古屋の税関にも出入りするようになって、自然に貿易の経験をつむようになった。

このころ、かもじ製造といわれていたのは、かもじ原材料問屋のことで、尾関屋では北は仙台から関東一円、西は京阪神の関西一円のかもじ屋に半製品を卸していた。当時、名古屋市内には中島屋（中彦）、岡米、土屋、万徳、大島などの同業者があり、知多郡でも資産のある者は直接この半製品を東西の問屋へ卸していた。

そうなると、自然、同業仲間の横の競争もはげしくなったので、尾関屋でも知多郡の半製品をひきうけて横須賀に工場をつくり、その半製品を製品化するかもじ製造を開始するようになった。ある年のこと、市中の某々問屋に売りこんだ原料代金の手形決済の期日がきてもその手形がおちず、そのため製品を東西へ投げ売りして

失敗したこともあった。

このほか治助は、人毛ハヤネットも輸入した。このネットは人毛でつくられていたため価格もたかく、贅沢品だというので十割の輸入税がかかるようになり、かえって密輸入がさかんになって市場を乱すようになった。

漁網でつくられた人造ネットが内地で売りだされるようになったのは、昭和四年ごろのことである。このハヤネットは、人毛にくらべると価格も安く丈夫なため、ハヤネットは、ついに人造時代をむかえるようになった。ゴサマーハヤネットは、このころ東京の岩谷商会から発売された人造ネットで、尾関屋も代理店として、その拡売にちからをいれた。

若くして問屋街の役員に

むかしの封建時代のなごりは、どこの土地にも日支事変がはじまる昭和十二、三年ごろまでは、いろいろの形ちで内包ないほうされていたようである。宮本又次博士の著書によると大阪の船場の問屋街には、とくに階級差別的な意識が濃厚で、いわゆる持てるものと持たざるものの社会的な地位のちがいといったものは、卑屈なまでに表面にあらわれていたようだ。

問屋街として多年の伝統と歴史をほこる末広町にも、戦前のある時期までは、こうした階級的な差別意識のあらわれは地元の人びとのあいだにもハッキリとみられたのである。その一例をあげると、おなじ町内に住んでも家持ちと借屋人とは、町内つきあいのうえにも一種のさだめのようなものももうけられていて、それ

が自然にその店の家格といえるものを形成していた。

そうした因習にとらわれた問屋街にあって、いわばそのころ、まだ新参者のように思われていた治助が、大正八年に二十七歳の若きで、この町の役員に選出された。こうしたことは当時の末広町としては、まったく前例のないことといわれていた。

このことについて治助は、後年、つぎのように述懐している。

「私は、お見かけどおりの人間で、人のお世話などができるような柄ではないが、つい周囲の人たちから持ちあげられて、若年の身をも顧みず町の役員をひきまけるようなハメになってしまったわけで、これが一つの動機ともなり、そのうち関係団体や組合の役員や、世話役にひっぱりだされるようになってしまった。世間には私よりも有能な人がいくらかもおられるのに、妙なまわりあわせになったものと思

っています」

これは治助の謙遜けんそん話にすぎないが、こうしたことは、いうまでもなく治助の平素の実直な人柄と、その円満な性格を誰からも買われてのことであつた。

治助は、明治二十六年七月うまれの癸巳みづのとみの年である。易えきによると、この年にうまれたものは腰が低くて交際家で、何ごとにつけても七、八分のところで思いとどまり、調子にのりすぎて限界を越すようなことがない——というように占うらなわれている。治助は、まったく、こうしたタイプの持ち主である。

また保守主義のように思われている反面、自分の所信は遠慮なく披瀝ひれきして実行にうつしてゆく実行型のタイプの持ち主でもある。治助のこの性格は、七十二歳の老境にはいったいまも、昔もすこしも変りがないようである。

家庭円満第一主義

治助は「大正時代」に格別な郷愁をいだいている。治助にとっては、この時代は年齢的にも、また自分が商人として尾関屋の基礎がためにも、文字どおり粉骨碎身の努力をつづけてきた時代だからである。

前述のように、治助は店の経営にたずさわるかたわら、人毛輸入のため支那貿易にこころを配ったり、知多郡横須賀町の日本人毛商会や製造工場を監督するほか、毎月定期的に東西へ出張したり、隔月には北陸地方にまで出かける商用が、つねに治助の身边を駈りたてていた。

そうしたなかにあつて、しつかり者の妻女のこと、夫の留守をよくまもり、店の営業をきりまわしていた。このころの尾関屋には五、六人の店員と二人の女中を

雇っていた。家庭には、すでに長男の円一郎をかしらに長女のトシ子、次女のセキ子（のちに尾関屋専務森秀夫に嫁す）、次男の治男（のちの尾関屋常務）の四人の子宝がもうけられていた。

ことは三十代の女ざかりで、これらの四人の子どもの教育に精をだすかたわら、店員たちの身のまわりの世話なども、あれこれとめんどうをみていた。治助は後顧こうこのうれいがなく、出張先きにあつて存分に商売にうちこむことができた。

こうした環境にあつて、治助は「家庭円満第一主義」を堅持していた。家にどんなに蓄財があつても、精神的に不愉快なわだかまりがあつては、家庭に不和をまねくものになる。というので治助は、つねに堅くこのことを肝きもに



—夫妻で別府
にあそぶ—

銘じていた。

だが、治助とても木石ではない。商用で各地へ出張すれば、取引先きとの交際もあり誘惑などもあつて、相当に遊びのカネもつかったが、ついぞ酒と女におぼれることはなかった。

大阪の川口では、支那商館チャンクイの主人やブローカーとの商取引きとなると、晚餐に川口の豪華な支那料理をふるまわれたあげく、南地なんちの花街かがいへでかけたり、ときには尼ガ崎いこまや生駒、奈良方面へ遠征して一泊することもあつた。そうしたときの遊びの費用は先方もちだったが、たまには、これらの華僑が名古屋へやってくることもあつて、とにかく商売上、そうした遊びの機会が多かつただけに、酒と女の誘惑は、いつも治助につきまといつていた。

だが、治助の志操堅固は、これらの誘惑にうちかかって、たとえ花街にあつても家

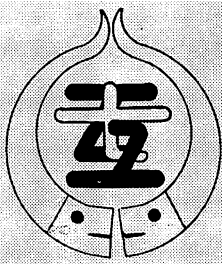
庭のことをおもい、家庭の円満第一主義をわすれることがなかった。

このころ、かもじの尾関屋の名は全国的に知れわたっていた。

業界最初の見本市団体

さきに名古屋業界の中堅卸業者で結成された親和会の有力メンバーによって、七互会という団体がうまれたのは、昭和二年の春のことである。

この七互会というのは、そのころの小間物、化粧用具、袋物、かもじ、貴金属、かのこりボン、木櫛、組糸などの卸業者のあつまりで、毎年春秋の二期に見本市をひらくというのが会の目的だった。結成当時のメンバーは、尾関屋、桑山商店、花木商店、味岡屋、成瀬商店、万庄商店、十三屋の七店であった。七互会という会の名



称も、そこから名づけられたが、のちに石塚商店が加盟して会員は八店になった。このころ、名古屋における見本市団体といえば、名古屋商工会議所をバックにした実業同志会主催の総合卸見本市があっただけで、業界関係の単独見本市は、まだ催されていなかった。

だが、時代はすでに、われわれの業界にあっても、そうした単独見本市の設立を待望していたのである。こうした機運の到来していることを察していた治助は、親和会の二、三の運びとに相談をもちかけて

「もし事情がゆるされるなら、一業一店を原則とした業界中心の見本市団体をつくろうではないか」

というところから、親和会の有志によびかけて結成されたのが、業界最初の見本市団体といわれる七互会だったのである。

この七互会は、毎年四月と十月の二回の定期に、広小路の東ずし本店の二階を会場として見本市を催したが、毎回の見本市には客足を吸収して成果をあげた。毎期のこの見本市の売りあげ成績をみると、いつも尾関屋と桑山商店の二店で、会の総売りあげ額の半数をしめていたといわれているから、このころの両店が業界にしめていた勢力の一端を知ることができる。

七互会では、会の付帯事業として、会員の総合カタログともいえる「七互会商報」を発行して、お客のPRにつとめたが、その積極的なうごきは時代の先駆的役割をはたしていたといえよう。

昭和十二年の秋、七互会は、その創立十周年の記念祝賀会を千種区池下町の紅葉館で盛大に催し、六、七十名の小売店を招待したが、当時は、すでに日支事変の序の口で物価の統制時代にはいっていったため、この会も自然休会の形ちになってしま

った。

戦後、業界関係の見本市団体として二、三のものの発足をみるようになったが、いまから四十年前に七互会を結成して、業界のパイオニア的存在を讃えられていた、この会の指導的立場にあった治助たちの功績は、業界青史のうえに永く記録されることであろう。

上海・南京視察

昭和七年の六月ごろ、治助は南支那にあそんだ。これは当時、人造ヘヤーネットの有名品として知られていたゴサマーネットの代理店招待によるもので、その一行

の顔ぶれは東京のヤマキ、森本、近源、大阪の馬場惣、大和屋、名古屋の佐竹、中彦、尾関屋の代理店主ら十名であった。

一行は天保山から大阪商船の春洋丸で出発した。約十日間にわたる長途の旅だったが、上海を中心に奥地へは行って蘇州、漢口、南京を見物して、さらにひき返して抗州をたずねた。これらの南支那のめずらしい風物は、一行の異国情緒をかきたてたことはいうまでもないが、治助にとっては、人毛輸入の支那貿易の体験があるだけに、こうして始めて実際に現地を視察する機会にめぐまれたことは、商売のうえにも大きなプラスになった。

ところで、この南支那見物で治助の興味をひいて、いちばん印象にのこったのは、上海のドック競技と金相場の取引き所のふたつの風景であった。



—上海風景—

ドック競技というのは、つくりつけの兎うさぎを電気じかけで走らせ、それを八匹の犬に追わせ、はやく兎にかみついた犬が勝つという競技で、競技に出場する犬の首には、それぞれ番号がつけられているのである。つまり競馬が犬にかわったようなもので、見物人は、その馬券ならぬ犬券を買うのである。

ところが、犬に追われる兎は、電気じかけになっているので、なかなか兎には追いつけない、というところがミノなので、競技がはじまると場内はワツという喚声わんせうで騒然となり、上海ならではの見られない愉快な競技といわれていた。

もうひとつの金相場の取引き所というのは、当時、支那の金相場は、その日その日によって金の為替相場がちがっていた。その金相場をきめるために設けられた取引き所のこと、相場の立ち合いがはじまると、立ち合い人は五、六寸ぐらいもある金の延べ棒をチリン、チリンとうちあって音をたてながら金相場をきめるという

もので、いかにも当時の支那にふさわしい長いヒゲをたくわえた、悠揚^{ゆうよう}迫らぬ大人^{たいじん}然^{ぜん}たる男が身に支那服をまとうて、樂^{らく}しげに金の延べ棒をうちならしている姿は、これもそのころの支那ならでは見られぬ、めずらしい見もののひとつであった。

当時の支那の物価は、日本の半分に相当していた。邦貨で一万円持ってゆくと、それが倍の二万円に通用した。治助が内地を立つときに二十円で買ったトランクが、上海では半額の十円で買えた。

空襲で新店舗を焼く

日支事変が発生したのは昭和十二年七月のことである。このころから政府の物価統制は着々としてすすめられ、十四年九月十八日には九・一八令といわれた価格停止令が発令され、一切の商品価格はその年の九月十八日をもってストップされた。ついで翌十五年七月には奢侈品禁止令とともに暴利取締り令が公布されたが、とくに九・一八令の実施は、一般業界に大きな打撃をあたえた。

越えて十六年七月になると、物価局がもうけられ統制価格令の発令によって、小間物商品にも丸協価格（のちに丸公価格となる）が制定され、その価格査定機関として愛知県身辺雑貨卸商業組合が設立された。このころ治助は、愛知県小間物雑貨卸商業組合の役員のひとつとして、これらの査定機関のめんどろをみるなど公私ともに多

一尾関屋の旧店舗一
(昭和29年ころ)



忙な毎日をおくっていた。

こうしたうちにも戦争は日とともににはげしさを加えて、店の従業員の大半が兵役や軍需工場の徴用にひきぬかれ、商品も資材の統制で不足がちになり、さしもの伝統をほくる末広町の問屋街にも暗雲がただよいはじめたが、十九年三月十九日の空襲につぐ翌二十年五月の再度の大空襲で、

鉄砲町、末広町の問屋街も灰燼に帰してしまった。

このときの空襲で焼けた尾関屋の店舗は、昭和五年四月、治助が将来のことを考え、末広町二丁目の東側に土地をあらたに購入して店舗と住宅とをあわせて普請したもので、間口五間、奥行き二十五間の二階建てという宏壮なものであった。この家屋の用材には、米松の二尺五寸の五間通しのヒトミ材をつかい、屋根瓦にも凝っ

たものが用いられていた。これは当時としては思いきった物量を投じた大普請であったが、惜しくもこの家屋は店舗もろとも、このときの空襲で焼けてしまった。このときの米松のヒトミ材は、空襲ののちも二、三日くすぶりつづけていたという。

この店舗は末広町二丁目の現在地にあったが、尾関屋が末広町に移転してから三度目に購入した土地に建てられたものであった。

戦後犬山で営業再開

焼け野原と化した末広町の問屋街には、かつての戦前のおもかげは、その片影すらみられなかった。そのひろびろとした焼け野原のどすぐろくムクレあがった焦土

のかたまりを危なげに踏みしめて、飼い主をうしなつた野良犬が、あてどもなくさまつている姿は、ものの哀れを感じさせた。ちかく、このあたりにアメリカの進駐軍の家族の住宅ができるという噂さが、チラホラきかれた。

治助は、一日もはやく末広町へ復帰して、バラックづくりの仮営業所なりともかまえたいと思つたが、当時の状況では、どうにも手のつけようがなかつた。だが、さいわいにも昭和区北山町の別宅が焼けのこつたので、ここで営業を再開する予定だったが、北山町には治助たちの脊族けんぞくが一時しのぎに同居していたので、戦災をうけた翌々月の五月、治助の郷里の鶴沼にちかい犬山市本町に一軒の借屋を借りうけ、ここを仮営業所として営業を再開した。

戦災直後のこのころは、商人の誰しもが経験したことだが、商品の集荷には、ずいぶん苦労をした。そのかわり集荷した商品は、およそ商品と名のつくものであれ

ば、なんでも現金でとぶように売れていった。

末広町時代には十二、三人いた店員も、この犬山の疎開先きでは、わずか二、三人になってしまい人手不足のところから、治助も創業の精神にかえって、よく商品仕入れに大阪へかよった。このころの話である。毛ピンのニスのぬったザラザラしたお粗末なものが、バラでひと包み四百本を新聞でくるんであって、仕入れ原価二十五円のもものが三倍の七十五円から八十円で売れた。

「こんな商品でも奪いあいの有様で、わざわざ高山あたりから交通の不便な犬山まで仕入れにきてくださるお客もあった。なかには米や食品を持ってこられるお客もあって、こちらが恐縮したものです」

こうしたことは、戦後の売り大名時代の問屋には、どこにもみられた店頭風景のようだった。

そのころ、こんな話があった。岐阜県の養老町に東京から疎開して蒔絵まきえぐしをしをこしらえている職人があった。治助夫妻は評判をきいて、そこへ仕入れにでかけた。すると、その店には二、三人の同業者がおなじように仕入れにきていた。治助は、ここでつくられている蒔絵ぐしを手にとってみて、これはめずらしい買い物になると考え、いくぶん冒険的な気持ちもあって、一枚五十銭から二、三円のものを買った。時のカネで五万円もだして仕入れてきた。

この蒔絵ぐしは、治助たち夫妻が予想していたように進駐軍のあいだによろこばれて売れはじめ、ついに一枚十五円までにつりあげられたという。

末広町へ復帰

犬山の仮営業所から北山町へ移ったのは、翌年の昭和二十一年十月のことである。

戦後は、業界の様相もかわり、また取扱い商品の内容もちがってきたので、尾関屋の仕入れ商品も頭飾付属品から小間物類にきりかえられるようになった。地理的にいって、この北山町は交通の便利な場所ではないが、それでも戦前からのおなじみ客は、連日、この北山町の尾関屋の店に殺到した。治助は、これらの多年の顧客ほどありがたいものはないと思って、ひそかに感謝の気持ちでいっぱいだった。

治助は、商売の余暇をみては、末広町の役員の人びとも会合して問屋街の再建にちからをつくした。こうした努力のかがあって、住宅公庫の斡旋で十五坪の平

屋建て家屋が十五軒ぶん町内にたつことになった。一軒の値段が二万二千円だったが、時価としては安くはなかった。

そこで治助は、住宅公庫に交渉して間口四間、奥行き三間の二階家の普譜ふしんにとりかかったのは十一月のことである。めずらしい大雪で壁をぬることができず、覺も思うようにはいらなかったが、ともかく、こうして尾関屋の店舗は、戦前の現地の焼けあとにできあがり、末広町の復興にひと役はたしたのである。

そうしたとき、応召で大陸にわたっていた次男の治男が無事に帰還して、末広町の新店舗をおとずれたのである。治助親子はたがい涙のうちにその無事を祝いあい、手をとってよろこびあった。昭和二十二年二月二十二日のことである。

末広町の問屋街は、こうしたことが復興の足がかりとなり、お隣りの鉄砲町にも店舗が建ちはじめたころ、この問屋街にとって、まったく驚天動地きやうてんどうちともいふべき一

大事件がもちあがった。

それは、この問屋街の背後の焼けあと一帯の五万数千坪の広大な地域に、進駐軍の家族を収容するアメリカ村の建設計画が内定していて、鉄砲町、末広町の西側の指定地域にかぎり家屋をたてることは、絶対にまかりならぬという市当局からの厳達である。こうしたことが実現しては将来の問屋街の機能は半減されてしまうばかりか、こんごの町の復興にも大きな影響と支障をきたすことになってしまうのである。

この重大な通告におどろいた鉄砲町、末広町の問屋街の役員たちは、ときを移さず地元問屋街によびかけて「アメリカ村撤廃期成同盟会」を結成。いっぽう市当局や商工会議所をうごかして再三、再四にわたり進駐軍首脳部と折衝をかさねた結果、ついにアメリカ側



の要求をしりぞけて初志を貫徹することができた。

このアメリカ村問題が発生以来、いくたびかの変遷があつて、こんにちの名古屋本通り問屋協同組合がうまれたのである。治助は、この組合の役員のひとりとして戦後の問屋街の復興と完成に献身的な努力をささげてきた。

話は前後するが、これより先き昭和二十一年の七月、南方に出征していた幹部店員森秀夫が無事に内地へひきあげ、北山町の仮営業所に元気な姿をあらわした。治助たちの一家は祝杯をあげて秀夫をむかえた。秀夫は、まもなく治助の二女セキ子と結婚した。こんにちの株式会社尾関屋の専務である。

連鎖市の育ての親

昭和二十一年の春ごろ、名古屋駅を中心として駅周辺問屋連盟が結成された。この連盟の目的は、地の利を利用してお客を駅周辺にひきよせ、サービス券でお客優待をおこなっていたが相当の人気をあつめていた。また東区には東部問屋連盟があつて、駅周辺とおなじようなお客優待をしていた。

このころの鉄砲町、末広町は、ようやく戦災から立ちあがって復興の緒ちよについたとはいえ、戦後の問屋街としての存在は、まだまだ一般に知れわたっていないかった。そのPRが痛感されていた。そこで駅周辺問屋連盟にならつて鉄砲町、末広町に名古屋中心問屋連盟が生まれ、その第一回の連鎖市がひらかれたのは昭和二十二年七月のことである。設立当初の加盟店は四十店で、初代幹事長には大野喜助が

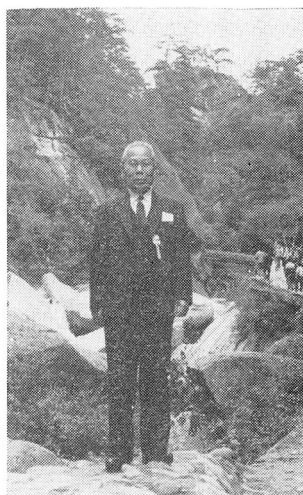
就任した。

以来、この中心問屋連盟の連鎖市は、毎月上旬の三日間を定例日とし、奉仕券を発行して来客のサービスにつとめてきたが、その第

一回お客招待会は熱海の大野屋で催された。戦時中は、ひさしくこうしたお客招待が自粛されていたので、たいへんな人気を博した。

治助は、この中心問屋連盟の設立発起人のひとりとして、また連盟の役員としてその育成につとめてきたが、二十三年の春、大野幹事長のあとをうけて連盟の二代目幹事長に推された。

中心問屋連盟は、そのち運営面のうえに移りかわりがあった、こんにちの「鉄砲町・末広町問屋連盟」となり、連鎖市は回をかさねるにつれて小売店の有力な仕



—湯村温泉のひととき—
(連鎖市招待)

入れ機関として発展をつづけてきた。治助はこの問屋連盟の会長の要職にあること十六年のながきにわたったが、昭和三十七年五月の連盟の定例役員会の席上で

「私は、すでに店の営業上のことは社長にまかせて第一線から身をひいているので、この際、連盟の会長を辞退させて頂きたい」

との堅い決意をのべて辞意を表明した。そして惜しまれながら連盟の会長を辞任した。治助は、そののち連盟から多年の功績を表彰せられ、記念品を贈られて顧問に推選された。

ひと口に十六年というが、戦後の混乱期にあつて壊滅かいめつにひとしい鉄砲町、末広町の間屋街復興のために、あくなき努力をつづけてきた治助としては、連盟の会長をしりぞくにあたつて万感ばんかんこもごも、つきせぬ思いが胸中を去来したことであろう。

だが、連鎖市の育ての親として酬いられた十六年の労苦を思いおこせば、治助と

しては、ひとしれず感懐かんかいにひたる日もあることであろう。

趣味としての義太夫と謡曲

治助は、若いころから商売のなかに育ち、商売のなかに生きぬいてきた勤勉な商人であるが、商売の余暇を利用して、若いころから義太夫を習っていた。末広町に店をもつようになってからは、町内の同好仲間と、そのころ大須の文長座の隣りで旅館をいとなむかたわら、義太夫をおしえていた師匠のところへ毎晩けいこにかよった。そのころの義太夫仲間に同業の佐竹鉾三郎、山田乙三郎などというひとがいた。治助は、いちばん年少者だった。

ノドが上達するようになると、南桑名町の野沢という師匠について本格的に義太夫をならいはじめた。治助の芸名は、末広町にちなんで末広太夫といったが、けいこ仲間の温習会かみしもで袴かみしもを身につけて、お得意の「三勝半七」などのひとくさりを披露におよぶ場面は、くろ、とと思えるほどのできばえだったといわれている。

それほど年期のはいった義太夫も、戦後のある時期には三味線の糸が思うように手にはいらなかったので、義太夫をあきらめて金剛流の謡曲をならいはじめた。師匠は、ちかくの白林寺の和尚だったが、この謡曲仲間には同業の渡辺儀一、靴下問屋の徳永寛一などといった人びとの顔ぶれがみられる。これらの謡曲仲間ばくようで莫用会というグループが結成されているが、治助は、また金剛流山田社中の春鶯会のメンバーのひとりとして、昨年十一月、若宮八幡わかみやでひらかれた秋の謡曲囃子会かみうたで、神歌かみうたの翁おきなを披露して京都の金剛流宗家から奥儀おくぎ皆伝かいでんの免状をさずけられた。



義太夫と関連して、治助は、歌舞伎の造詣もふかい。むかし若宮の末広座でみた先代幸四郎の勸進帳の弁慶や、先代羽左衛門の富樫^{とがし}、先代仁左衛門の沼津の平作などの舞台姿は、いまもハッキリと印象にのこっているという。

これほど趣味として義太夫や謡曲や歌舞伎にうちこんでいても、治助は、これらの芸ごとに熱中したり、芸のためにハメをはずしたことは、いちどもなかった。治助にいわせると

「義太夫や謡曲をならっていると、第一に姿勢もよくなる。そして腹の底から声をしぼりだすので健康上にもよい。だから私は、これらのものを一種の健康法だと考えてならってきました」

といっているが、元来、治助の処世哲学は、なにごとくも適度に——”というところ

ろにその目標がおかれている。

タバコは、若いころには嗜たしなんだが、いまは禁煙をまもっている。また社交上、治助は宴席などにでる機会が多いが、そうした酒の席でも、めったにハメをはずして自制心をうしなうようなことがないのも、なにごとく適度という日ごろの処世哲学からきているのである。

恵まれた健康

養父の利三郎は、病弱の身で生涯をおくったのにひきかえ、治助は、天性健康にめぐまれていた。それには平素から自分のからだの健康保持につとめているが、こ

んにち七十二歳の老齡をむかえて無病息災をほこり、その顔のいろツヤや、腰の張りなども壯者わかものとかわりがないのも、天性まれな健康型である。

治助が、かつて病氣らしい病氣にかかったのは、終戦当時のこと、犬山の疎開先きへ毎日かよっていたころ、北山町の別宅で三カ月ほどわずらって床についたときぐらいのものである。このときは肝臟かんぞうと腎臟じんぞうとが併発して、三十七度ぐらいの微熱がすこしもひかなかった。

この病氣が全快してからは、すっかり健康をとりもどして、当時、十五貫の体重が、いまでは十六貫にふえて減ることがなくコンスタントな状態にあるという。戦前、治助は痔ぢをわずらったこともあるが、すぐ全治してしまった。

治助は、有志と「朝風匠会」をこしらえて、毎日、赤門の銭湯へでかけ、また第一日曜日には朝風呂の帰りに若宮の八幡やわたでひらかれた朝食会をたのしみにしていた

が、治助にいわせると、朝風呂は健康法のひとつで、からだ体をシンから温めて湯あがりすればめったに風邪をひかないそうであるが、これも健康人なればこそ言えることであろう。

〃その日の気持を忘れるな〃

若い世代への教訓として、最近、福沢諭吉ふくざわゆきちの〃心訓しんくん〃や、一代の成功児、ナシヨナル電器の松下幸之助の書いた経営読本などが人気をたかめているのは、その説とかれていることが、机上の理屈や耳学問からきたおしえではないからである。一流作家の書いた小説よりも、一少女が貧苦の家庭生活を日記につづった「にあんちゃん」

の記録のほうが、大衆に迫るものを持っているのは、作家のあたまで書いたものより真実性があるからである。

尾関屋の森専務の話によると

「うちのおや、じさん（治助会長のこと）の人生訓は、その日の気持ちを忘れるな」ということです。いつも、このことを新入店員に言ってきましたが、新入店員の気持ちというものは純真です。この純真な希望にみちた入店当時の気持ちを、いまの若い店員たちが、いつまでも忘れずに肝きもに銘していたならば、将来、一人前の店員として働らくようになってからも、誘惑に負けたり、わるい感情にとらわれるようなことがない、という意味のことをおや、じさんは持論のようにして、店の若い者に言ってきました」

というのであるが、治助会長のこのおしえは、こんにちの尾関屋の従業員で誰ひ

とり知らぬものがないほど行きわたっている。治助会長は幹部店員の婚礼の席上でも、いつもこのおしえをくり返しのべて、結婚当日の緊張きんちやうした気持ちを永久に持ちつづけてほしい——ということを新郎新婦にたいする華はなむけのコトバとしていっているとわれている。

その日の気持ちを忘れるな——。世代の若い人たちに言いきかせている治助会長のこの垂訓すいんは、いうまでもなく治助会長そのひとの七十余年にわたる人生勉強の結果がうんだ生きたコトバなのである。

年輪としわを超越した奉仕精神

あの人は「世話ずきだ」ということを、よく言われる。この世話ずきだといわれる型のひとは、例外なく自分の地位が安定していて、その身边に時間的なゆとりをもっているひとにかぎられているようである。だが、とかくこうした他人の世話をするとすることは、自分の身を犠牲にしても顧みないほどの奉仕精神に徹した者でないといけないことである。

若いころから人なみ以上の苦勞を身につけてきた治助は、そうした意味で人なみ以上に人情の機微きびを解した、典型的な世話ずきタイプといえるのである。それはひとつには、めぐまれた治助の健康が自分の年輪としわを超越して、こうした奉仕の仕事に自分自身を駆かりたてているようにも思える。



現在、治助がいわゆる世話役として斡旋の労をとっているのは、組合関係をはなれては社団法人若宮八幡社の専務総代理副会長をはじめ、末広町の末広会の会長と

して、また豊川稲荷の豊川かなえ講の会計として、また京都伏見稲荷講の名古屋支部長でもあり、中消防署の危険物安全協会のセルロイド部会の理事として、これらの世話係りをしている。このほか、治助が現在関係して世話役をつとめている団体は、五、六種にとどまらないであろう。

また組合関係では、名古屋本通り問屋協同組合の副理事長、名古屋装粧品卸協同組合の理事長をつとめるいっぽう、日本装粧品組合連合会の理事をかねているが、装粧品組合とのつながりは、この組合の前身、名古屋小問物雑貨卸商業組合が昭和十五年七月

改組に際し、理事に就任以来のもので、越えて二十二年四月、森本理事長辞任のあとをうけて理事長となつて以来、実に十七年の久しいあいだ装粧品組合の名理事長として、こんにちにおよんでいる。

装粧品組合との関係は、これを通算すると理事に在任六年間、理事長をつとめること十七年間、つまり連続二十三年のあいだこの組合の役員として、その世話役をつとめてきたことになる。一組合の役員を連続二十三年もの永いあいだつとめてきたというような前例は、地元名古屋はもとよりのこと、東西の業界にもその例がまれだといわれている。

これも治助の人徳のいたすところであろう。

重なる栄光と金婚の賀

名古屋商工協同組合は、その創立十五周年記念行事として、昭和三十七年十月十八日、市会議事堂で傘下の組合功労者十六人を表彰して、杉戸市長から感謝状と記念品をおくったが、この十六人のうちに治助は同組合からえらばれ、名古屋装粧品卸協同組合理事長として名誉ある表彰をうけた。この表彰式に際し提出された治助の組合役員歴によると

昭和十五年七月、名古屋小間物雑貨卸商業組合設立とともに理事に就任↓翌十六年六月、愛知県小間物雑貨卸商業組合に名称変更とともに引続き理事に就任↓同十九年七月、愛知県小間物雑貨卸施設組合に移行とともに理事に就任↓同二十二年、愛知県小間物雑貨卸商業協同組合に移行、理事長に推選さる↓同三

十年七月、名古屋装粧品卸協同組合に名称変更引続き理事長就任、今日にいたるまで理事長として十六年有余、組合の発展に貢献しつつあるとなつてゐるが、そののち判明したところによると、治助がこの組合に理事としてえらばれたのは、昭和五年ごろというのが正しいようである。

後日の参考までに、ここに記しておく。

また治助は、この翌年の昭和三十八年十一月五日、愛知県中小企業センター・ホールでひらかれた第十二回中小企業団体愛知大会においても、装粧品組合の推進により「組合功労者」として栄えある愛知県知事の表彰をうけ、感謝状と記念品をおくられたが、さらに昨昭和三十九年七月二十日、愛知県の推進により団体功労者と



一多賀神社における金婚式に参列一
(昭和39年11月1日)

して中小企業長官から表彰されたが、このとき表彰を受けた組合関係功労者は全国で百十九名。表彰式は東京虎ノ門共済会館三階講堂でおこなわれた。治助も名古屋からこの表彰式に参列した。

このたびかさなる栄誉ある表彰をうけた治助は、昨年六月、人生の最大の慶事ともいふべき金婚の賀をむかえ、かさねがさねのよるこびにひたっている。このふたつの喜びをかねて、ちかく親戚知己、取引先きを招いて盛大な披露招宴を催されるはこびにある。

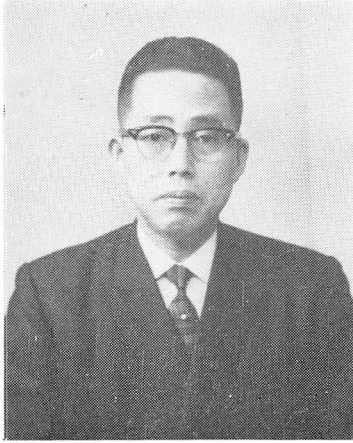
山田家一門のよろこびは、いうまでもなく株式会社尾関屋のほこりでもある。

株式会社尾関屋の歩み

尾関屋は昭和五年、これまでの治助の個人経営からその組織を合資会社にあらため、時代の移りかわりとともに、取扱商品も一般小間物類をとりいれるようになった。そのの数年、日支事変の勃発により昭和十二、三年を境いとして時局は急回転し、ついに局面は太平洋戦争を誘発して敗戦をむかえた。

そして世相は戦後の混乱期をへて、ようやく経済の安定期をむかえるようになったので、二十八年五月、尾関屋は、その組織を三百万円の株式会社に改めた。これを機会に治助は第一線をしりぞいて取締役会長となり、社長には治助の長男円一郎が就任した。重役の顔ぶれはつぎのとおりである。

取締役会長 山田 治助



同 社長

山田円一郎

専務取締役

森 秀夫

常務取締役

山田治男

監査役

山田利三郎

同

北村弘市

同

林 治太郎

ついで二十九年九月三十日、百五十万円の増資をはかって資本金は四百五十万円となった。この年の十二月十九日、監査役山田利三郎は昭和区北山町の別宅で逝去したので、盛大な社葬を執りおこなった。利三郎の行年は七十八歳であった。越えて三十四年三月一日、さらに資本金を八

百万円に増資して、あらたに山田トシ子を監査役とした。

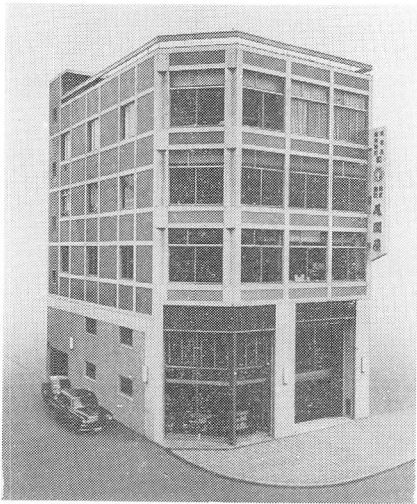
このころから鉄砲町、末広町の本通り問屋街にあって、中高層ビル建設問題がとりあげられるようになり「中高層耐火建設協議会」の発足をみるようになったので、尾関屋も卒先してこの団体に加盟し三十四年三月、工事をおこし翌年二月、間口七間、奥行十間、延べ三百坪の鉄筋コンクリート建ての近代社屋を完成した。

そして、この月の三日、この新社屋に東西をはじめ地元名古屋の取引先きメーカーと小売店約二百五十名を招待して盛大な新築パーティーを催したが、この新社屋の完成にひきつづいて、隣接の矢場町一丁目二十八番地に木造二階建て二十二坪の美容部を新築して、一階を美容部に二階を貸衣裳部にあてた。

ついで三十八年六月、株式会社尾関屋の資本金を千二百万円に増資し、さらに四十年一月、六百万円を増資して千八百万円の株式会社として将来の発展にそなえた

が、この増資を機会に幹部社員をあらたに重役陣に参加させ、持ち株制度をもうけて幹部社員の多年の功労に酬いるとともに、経営面の強化をはかった。また、時をおなじくして、会社の隣接地を買収し、美容部と衣裳部をここに移して、名実ともに株式会社尾関屋の新陣容を確立した。

この間^{かん}にあって、株式会社尾関屋では、東西・地元取引先きメーカーとの横の連繫を密接にするため「^{マルオ}尾会」を結成、その創立をかねた一泊懇親会を下呂温泉の湯之島館で催し、翌朝、日本ラインの清流に船をうかべて二日間^{かん}にわたる歓をつくした。こうしたうち^{かん}にあって、時のながれはマスコミ時代をうむようになった。株式



一尾関屋の現在社屋一



会社尾関屋では、このマスコミ時代に小売店の要望にこたえて、昭和三十四年四月を期して、「オゼキヤ・ニュース」第一号を発刊、以来ひきつづきお得意先きのPRに力をいれてきたが、この「オゼキヤ・ニュース」は号をおつて内容も充実し、商品仕入れのこよなき手引きとして小売店のあいだで好評をよんでいる。

創業以来、尾関屋はか、も、じ、問屋としてその名を知られてきたが、そうした店の実績とノレンがモノをいって、日本髪頭飾品の売行きは年々増加の一途をたどり、仕入れシーズンには海外からの引き合いがみられるほどである。「日本髪の尾関屋」として、化粧品とともに今後の需要のノビが予想され

ているが、いっぽう、美容部の業績も本格化してきたことは、やはりかもし、につながる因縁といえよう。

また戦後、治助会長の妻女のこと、が内職のつもりで始めた貸衣裳部も、こんにちでは多方面のお客から利用せられるようになり、地元のデパートからの紹介などもあつて、結婚シーズンともなれば文字どおりの繁栄をきわめている。

なお株式会社尾関屋では、つぎの三項目を社是しやぜとしている。それはお客の満足をうる奉仕の理念をもつて、社会大衆へ奉仕する努力を具体化することによつて「店の繁栄と従業員の安定した生活がえられる」というもので、このことを強調して、つねに従業員の育



成につとめている。

一、会社を通じて大衆への奉仕

(理念)

一、お客様には満足を

(奉仕)

一、従業員には安定した良い生活を

(努力)

付

録

名古屋の組合の歴史

明治二十七年のことである。そのころ門前町にあった愛知県商品陳列所を本部として「愛知県五二会」という団体がうまれた。五二会とは、当時の県下の重要物産とされていた織物、陶磁器、銅器、漆器、製紙の五種の商品をあつかう業者で結成された団体で、そのころのことばでいえば全国的に知られた勸業団体であった。五二会の本部長は先々代の岡谷惣助であった。

五二会は、その事業として全国品評会、東海五県連合品評会などを催したが、この品評会は相当に権威のあるものであった。

この五二会の雑貨部に小間物、袋物の卸・問屋業者が加盟しており、その雑貨部の役員として業界から宮田辰次郎が推選された。このころの地元業界には、まだ業

界単独の組合が結成されていなかったもので、業者間の必要なことは、すべてこの五二会の雑貨部のうちの小間物・袋物部会で協議されていた。

× ×

地元の小間物・袋物卸、小売業者の有志三十名ほどで「愛美会^{あいびかい}」という親睦団体が結成されたのは、明治二十九年五月ごろのことである。その発会式は、大須の七ツ寺の金城館を会場として催され、会長には宮田辰次郎がえらばれた。この愛美会には、そのころの地元の卸、小売の有力業者がほとんどあつまっていたという。

愛美会の存続期間はわずか四、五年のあいだのことであつたらしく、卸・小売合体の親睦団体とはいえ、この愛美会というのは名古屋業界における最初の業界団体だったという点で注目されてよいと思う。

× ×

愛美会解散ののち、純然たる卸業者の組合の設立をのぞまれる声がかまきり、明治四十一年の秋、小間物、袋物、化粧品卸業者の有志で結成されたのが「名古屋小間物袋物化粧品卸組合」である。この組合は俗に「三業組合」とよばれていた。最初の組合長は宮田辰次郎で、ついで先々代森本善七らが組合長になった。

明治四十三年三月、第十回関西西府県連合共進会が鶴舞公園つるまでひらかれたが、この三業組合の斡旋で、東京、大阪の化粧品、小間物、袋物卸業者をむかえて四月十六日、会場内の大観亭で全国業者大会が催された。これが名古屋における最初の業者大会である。

× ×

三業組合は大正四、五年ごろまでつづいたが、この三業組合のあとをうけて、大正六年四月に設立されたのが「名粧会」である。会員の顔ぶれは当時の地元の一流

化粧品、小間物、袋物業者らで村瀬谷三郎、宮田辰次郎、伊藤東兵衛、森本元藏、村上庄造、馬淵源六、鷺津太七、佐野鐘治郎、金森太七の九名であった。

名粧会は、ある時期、名古屋における唯一の有力な業界団体として活躍したが、そののち「名商会」と改称、これまでの会員のほかに鉄砲町、末広町の有志をくわえ、従業員の修養講演会を目的として、大正八、九年ごろまで存続したが、すでに当時は業界団体としての機能はうしなわれていた。

×

×

業界の発展にともない、前記の三業組合の構成メンバーで、それぞれ業界を中心とした業種別単独組合が結成されたのは、大正九年のことである。大正八年の下半年から翌年の三月ごろへかけて経済界は不況に見舞われ、世相は混乱をきわめて銀行のとりつけ騒ぎなどがちあがった。こうした時代こそ、業者の横の連絡をたも

つべきであるというのが、当時の業者のあいだの一致した意見で、ここにつきの三組合の設立をみるようになった。

▽名古屋小間物卸商組合（大正九年三月）

▽名古屋化粧品卸商組合（同 年五月）

▽名古屋袋物卸商組合（同 年十月）

これより先き、大正四年ごろ小間物卸業者十五、六名によって単独の組合が組織されたが、離合集散の形ちをくりかえして、どちらかといえば判然とした組合の形体をなしていなかったようである。

以上の三組合のほかに、業界の姉妹組合としては、名古屋石鹼製造業組合が石塚元行を初代組合長としてふるくから存続しており、また名古屋香油商組合、名古屋かもじ商組合の二つの組合が石鹼組合について歴史ある団体として知られていた。

また、こんにちの地元化粧品メーカーの団体、名商会協同組合の前身ともいうべき「中央国産商友会」がうまれたのは、大正九年一月のことである。この商友会は別に「誠議会」という団体をつくり、毎月一回商品交換会を催した。

おなじ年の大正九年には、まげ形卸商組合が結成されており、また組糸商組合もこの時代に発足した。

×

×

これまで離合集散をつねとしていた小間物、化粧品、袋物の三組合も、それぞれの単独組合の結成によって、ようやく業者間の意思の疎通をはかるようになったが、元来、業種別組合を設立して業者間の連係をはかるという点では、名古屋業界は東西業界にくらべると問題にならぬほど立ちおくれていたのである。

それというのも、昔から名古屋の業界には、おなじ業界内に小党派的な根性^{こんじょう}がみ

なぎって、それがいろいろな意味で、わざわいのタネになっていたといわれている。

×

×

以来、名古屋小間物卸商組合は順調な発展をとげ、昭和五年四月以後、かもじ、まげ形業者らをあらたに組合員としてむかえ組合の拡充につとめてきた。

だが、日支事変の発生をみるようになって事態は一変し、昭和十五年三月、当局の要請にもとづいて商業組合法によりその組織をあらためて「名古屋小間物雑貨卸商業組合」に改組、ついでその年の七月、物価局の設置とともに統制価格令が発令されて、小間物商品にも丸協価格（のちの丸公価格）の公布をみるようになり、その価格査定機関として「愛知県身辺雑貨卸商組合」を設立、翌十六年六月には、豊橋、岡崎をはじめ県下の卸業者をあわせて、名称を「愛知県小間物雑貨卸商業協同組

合」と改めた。

ついで二十年五月、名古屋市一円にわたる空襲によって組合員は離散したが、戦後経済の復興とともに組合員の営業状態も復活して組合の基盤もようやくかたまり、二十二年四月、その組織を変更して「愛知県小間物雑貨卸商業協同組合」となり、また二十八年五月には、県下組合員の脱退を機会に名称を「名古屋小間物雑貨卸商業協同組合」とあらためられ、さらに三十年六月には小間物の名称変更にともない「名古屋装粧品卸協同組合」となって現在にいたっている。

昭和四十年二月一日 印刷
昭和四十年二月十日 発行

(非売品)

編纂 山田治助伝記刊行会

発行者 山田 円一郎

名古屋市西区則武新町二丁目

印刷所 新光印刷株式会社

名古屋市中央区末広町二丁目

発行所 株式会社 尾関屋

